

ピクシー絵本についての研究調査

——表現における表象について——

有 田 や え

Research Survey on Pixie Picture Books: On Representation in Expression

ARITA Yae

Abstract: The “Pixie (Little Fairy) Picture Book” series has been published in Europe since it was first released in Denmark in 1954. In Japan, Shogakukan released these picture books from 1974 to 1975. The Pixie picture book series is currently out of print. The appeal of pictures in picture books is as important as that of words. This paper documents each book and investigates the representation of this series of picture books.

Key Words: pixie picture books, small picture books, picture book representation, picture books

要旨: 1954年にデンマークで発売されて以来、ヨーロッパで出版されている「ピクシー（小さな妖精）絵本」シリーズ。日本では1974年から1975年かけて小学館が発売した絵本である。ピクシー絵本シリーズは現在絶版となっている。絵本における絵の魅力は、文字と共に重要な事柄である。本稿では一冊一冊の記録と共に、このシリーズ絵本の表現における表象について調査した。

キーワード: ピクシー絵本、小さな絵本、絵本表現

1. はじめに

ピクシー絵本はデンマークの絵本で、10センチ四方、ホチキス製本の絵本のシリーズである。デンマークの出版社カールセンが1954年に創刊。ピクシー絵本は、北欧を中心にヨーロッパ各国で発行され続けており、現在までに1200以上のタイトルが出版されている。日本では、1974年から1975年にかけて、小学館がピクシー絵本の一部を邦訳して発売されていた。小学館版ピクシー絵本は、66冊が刊行され（表1）、一冊60円で販売されていた。小学館版ピクシー絵本は、北欧やヨーロッパの作家やイラストレーターが手掛けた作品が多く含まれており、日本ではあまり知られ

ていない作家や作品を紹介する役割も果たしていた。小学館版ピクシー絵本は、当時人気を博したが、その後は絶版となった。2000年には、フェリシモ出版が小学館版ピクシー絵本の一部を新訳で復刻。フェリシモ出版より《ピクシーえほん》として復刊された。フェリシモ版《ピクシーえほん》は、全6集36冊が刊行され、こちらも現在は絶版となっている。復刊版は、絵本のタイトル、物語の内容、文章の字体、主人公の名前、絵の構成などに多少の変更が加えられている。小学館のピクシー絵本は全66冊に対し、フェリシモ出版では全36冊である。どちらの絵本もサイズは同一である。小学館版は笹徳印刷工業株式会社で印刷されており、フェリシモ版は富士精版印刷株式会社で印刷されている。

絵本は、絵の絵画性と物語性が一体となりひとつの物語となることが礎と踏まえ、物語の字体も絵本を構成する重要な要素のひとつである。ピクシー絵本（小学館出版）、ピクシーえほん（フェリシモ出版）の特徴は、共に文章の字体が物語の中で装飾されておらず全て同一であることが挙げられる。文字の装飾がないため、より一層物語の絵の絵画性や構成、物語の進行が直接的に読者に届く。

ピクシー絵本はデンマークを発祥とする長い歴史を持つ絵本のシリーズであり、日本では短期間で出版された後に廃刊となったが、その小さいサイズやデザインだけでなく、その内容やメッセージにも注目すべき価値があると言える。本稿では、絶版となった小学館のピクシー絵本について調査する。

2. ピクシー絵本の概要

70年代～80年代の書店の中の絵本コーナーに、透明な半円形のボールの中に無造作に小さな絵本が入れられており、その透明な半円形の球体に手を入れて絵本を選ぶようにして販売されていた。当時、書店での絵本コーナーに絵本が並べられている場所に、このような販売方法は画期的であった。子どもたちは陳列された絵本ではなく、小さな本が透明な半円形の球体の中に入った有様に興味をひいたと考えられる。半円形の球体に手を入れて絵本を選ぶのである。絵本を選ぶ際に、自分が選択した絵本ではなく、思いがけない絵本との出会いもあったのではないかと考察する。

裏表紙には、『小さいから大きな夢がひろがるのです。てのひらの中であたためたくなる絵本です。評論家 俵 萌子』（図1）とある。《俵 萌子（たわら もえこ、1930年12月7日-2008年11月27日）日本の評論家・エッセイスト》この裏表紙から読み取れるように、子どもたちの手のひらに収まるサイズでありながらも、絵本の中に魅力的な物語に触れることができるように制作されている。



図1 ピクシー絵本 裏表紙 小学館



図2 ピクシーえほん 裏表紙 フェリシモ出版

数冊の絵本の裏表紙には著名人からのこの絵本への推奨文が寄せられている。(表2) 児童文学者から歌手、動物園飼育課長、幼稚園園長、北欧文学者、と多岐にわたる著名人から寄せられた文章である。これらの文章は簡潔にピクシー絵本への推奨が記述され、子どもたちが絵本を手にとり、また購入する保護者が一瞥してこの絵本への薦めを読み取ることが可能である。フェリシモ出版のピクシー絵本の裏表紙では、この推奨文の記述はなくなり、《デンマークから 小妖精が はこんできた えほん》と表記されている。(図2)

表1 ピクシー絵本（小学館）

番号	題名	作	絵	訳	文
1	いたずらハッピー	ウルフ・シェンクマニス	イロン・ウィクランド	渡辺和雄	浜田けい子
2	ぼくはそらをとんだ	ペール・フリュンデルセ	マルグレート・レティシュ	渡辺和雄	那須田 稔
3	クロのおつかい	グレッタ・ヤヌス・ヘルツ	シュティク・ワイマール	原 まち子	浜田けい子
4	こねこのトルンテ	グン・ビョルク	イングヴァール・ビョルク	渡辺和雄	わだ・よしおみ
5	インゲルちゃんのことり	イルセローレ・トルネ	エバ・ウェンツェル=ブルゲル	渡辺和雄	福島のり子
6	おたんじょうびのけーき	グレッタ・ヤヌス・ヘルツ	イベン・クランテ	渡辺和雄	浜田けい子
7	ママおはなしして	M・C・ポッター	トニー・ブライス	原まち子	井上明子
8	こじかちゃん	ヨルゲン・クレヴィン	ヨルゲン・クレヴィン	渡辺和雄	井上明子
9	おおきな おにいちゃん	アンナ=カリン・ウレリウス	バルボ・ホルムベルグ	渡辺和雄	那須田 稔
10	ひとりぼっちのおとこのこ	A・M・コンスタンツ	A・M・コンスタンツ	渡辺和雄	那須田 稔
11	おじいさんといっしょ	カイ・ベックマン	カイ・ベックマン	渡辺和雄	藤原一生
12	ママほくできたよ	グレッタ・ヤヌス・ヘルツ	クリスティーナ・ディモウ	渡辺和雄	上崎美恵子
13	たまごはいくつ	エルシー・リグレイ	エルシー・リグレイ	渡辺和雄	那須田 稔
14	そうのピーター	グレッタ・ヤヌス・ヘルツ	イベン・クランテ	渡辺和雄	福島のり子
15	ねずみちゃんのおみやげ	エルシー・リグレイ	エルシー・リグレイ	原 まち子	那須田 稔
16	ようちえん だいすき	ローダ・マグラス	ローダ・マグラス	渡辺和雄	福島のり子
17	ピクチャーおじさん はしをかける	ヤン・ルーフ	ヤン・ルーフ	渡辺和雄	那須田 稔
18	じどうしゃができたぞ	ヤロミール&アイダ・ヴェスリー	ヤロミール&アイダ・ヴェスリー	原 まち子	福島のり子
19	だれかくつのひもをむすんでよ	ビルギッテ・ヘルツ	ローダ・マグラス	原 まち子	浜田けい子
20	くまさんのプレゼント	グレッタ・ヤヌス・ヘルツ	イベン・クランテ	渡辺和雄	浜田けい子
21	ふうせんりょうこ	グレッタ・ヤヌス・ヘルツ	イベン・クランテ	渡辺和雄	浜田けい子
22	あかいじどうしゃ	グレッタ・ヤヌス・ヘルツ	エリカ・マイヤー=アルベルト	渡辺和雄	福島のり子
23	ぼくのおもちゃばこ	G・J・ヘルツ	イベン・クランテ	渡辺和雄	上崎美恵子
24	おにんぎょうのメリーちゃん	G・マウザー・リヒトウル		伊藤洋一	福島のり子
25	おそうじだいすき	A・M・コンスタンツ		渡辺和雄	井上明子
26	ねずみのおまわりさん	ヨルゲン・クレヴィン	ヨルゲン・クレヴィン	渡辺和雄	福島のり子
27	いたずらつこだあれ	ヨルゲン・クレヴィン	ヨルゲン・クレヴィン	渡辺和雄	福島のり子
28	おさるのペンキやさん	ヨルゲン・クレヴィン	ヨルゲン・クレヴィン	渡辺和雄	上崎美恵子
29	たのしいかいすいよく	ヨルゲン・クレヴィン	ヨルゲン・クレヴィン	渡辺和雄	福島のり子
30	ぼくのおよめさんはどんなひと	ヨルゲン・クレヴィン	ヨルゲン・クレヴィン	渡辺和雄	上崎美恵子
31	ぞうのパンやさん	ヨルゲン・クレヴィン	ヨルゲン・クレヴィン	渡辺和雄	上崎美恵子
32	ぼくのヘリコプター	ヨルゲン・クレヴィン	ヨルゲン・クレヴィン	渡辺和雄	福島のり子
33	やさしいゆうびんやさん	ヨルゲン・クレヴィン	ヨルゲン・クレヴィン	渡辺和雄	上崎美恵子
34	12までかぞえましょう	ヒルデガルド・ボース	ヒルデガルド・ボース	渡辺和雄	藤原一生
35	きいろちゃんとみどりちゃん	ベンテ・フリトヒオフ	グンナー・アントン・ヴィレ	渡辺和雄	井上明子
36	そらをとんだめんどりさん	ゴッドフリー・リン	エリザベート・ウェプ	渡辺和雄	藤原一生
37	バスにのって かいものに	ヘレン・ヴィング	イルマ・ヴィルデ	渡辺和雄	わだ・よしおみ
38	もりのパーティ	ヘレン・ヴィング	イルマ・ヴィルデ	渡辺和雄	井上明子
39	いやだいやだ	エバ・ヴェンツェル=ビュルガー	エバ・ヴェンツェル=ビュルガー	渡辺和雄	井上明子
40	まで！ボールびよん	グレッタ・ヤヌス・ヘルツ	ビルテ・ミュールハイ	渡辺和雄	那須田 稔
41	わたしのあおいうさぎさん	カテリーヌ・スタールマン	ルート・トンプソン・ヴァン・テリネン	渡辺和雄	井上明子
42	メッテちゃんのひつじ			原 まち子	那須田 稔
43	ひよことおかあさん	ブルース・グラント	メリー・フィルディン	原 まち子	那須田 稔
44	こうまのゆうえんち			渡辺和雄	井上明子
45	ことりのけっこんしき	エバーハルト・ピンダー		伊藤洋一	福島のり子
46	どうぶつえん	R・マイヤー・ローテ	R・マイヤー・ローテ	井上洋一	井上明子
47	ペンギンぼうや	カーリー・ラリック	ブレイク・ドムス	原まち子	井上明子
48	あひるのびいこちゃん			渡辺和雄	井上明子
49	あかいとり あおいとり	ペール・ベックマン	ペール・ベックマン	渡辺和雄	那須田 稔
50	かわいひよこ			原 まち子	井上明子
51	ねずみちゃんのおるすばん	ミリアム・クラーク・ポッター	トニー・ブライス	渡辺和雄	那須田 稔
52	こぐまのぼうけん	バージニア・ハンター	マージ・オベツ	渡辺和雄	那須田 稔
53	あかいえりまき	エレン・アドラー	エレン・アドラー	原 まち子	那須田 稔
54	こぐまちゃんのえんそく			渡辺和雄	井上明子
55	はなかざりのぼうし	メアリー・G・フィリップス	エリノア・コーウィン	原まち子	井上明子
56	ちいさなきつね	マベル・ヴァッツ	イルマ・ヴィルデ	渡辺和雄	那須田稔
57	あこちゃんのこうもりがき	アン=マドレーヌ・ゲロツテ	アン=マドレーヌ・ゲロツテ	渡辺和雄	浜田けい子
58	ぞうがほしいな	グレッタ・ヤヌス・ヘルツ	イベン・クランテ	渡辺和雄	那須田 稔
59	おかしのぼうや			原 まち子	上崎美恵子
60	へんですよ へんですね	グレッタ・ヤヌス・ヘルツ	インガ・クリステンセンス	渡辺和雄	井上明子
61	おうさまとドラゴン	ヤン・ルーフ	ヤン・ルーフ	渡辺和雄	わだ・よしおみ
62	こびとのかつやさん	グレッタ・ヤヌス・ヘルツ	イベン・クランテ	渡辺和雄	福島のり子
63	3びきのやぎ			原 まち子	那須田 稔
64	しらゆきひめ（グリム童話より）	H・エプナー	G・マウザー・リヒトウル	伊藤洋一	福島のり子
65	あかずきんちゃん	L・シュヴァルツ	E・マウリティウス	伊藤洋一	上崎美恵子
66	おおかみと7ひきのこやぎ	F・ザーリング	ヴァレンタ・デリゲノン	伊藤洋一	上崎美恵子

表 2 ピクシー絵本 裏表紙 推奨文

子どもがいつもポケットにいれて持って歩ける本。楽しさの中で自分と社会を考えさせます。	波多野勤子 (児童文学者)
ピクシーは、北欧で有名な絵本です。かわいい妖精のような絵本で、絵もすてきだと思います。	山室 静 (北欧文学者)
小さいから大きな夢がひろがるのです。てのひらの中であたためたくなる絵本です。	俵 萌子 (評論家)
楽しさを持って歩けるユニークな絵本です。子どもたちにとって、新しい宝物になる絵本です	西本鶏介 (児童文学者)
さすが、アンデルセンの国。ピクシー絵本を読むと、幼い日の夢がかえってくるようです。	小柳ルミ子 (歌手)
てのひらにのる、いとどりの夢。きょうはどのおはなしをよみましょう・・・・。	安房直子 (児童作家)
子どもの空想力は限りがない。この本は、それを実にたくみにいかすことに成功している。	中川志郎 (上野動物園飼育課長)
小さくても、内容はしっかりしています。大きなドラマも展開しうる素晴らしい《掌絵本》です。	森久保仙太郎 (児童文学者)
子どもたちの小さな手に、ちょうど似合った、かわいい絵本。ママとおでかけの時にも読めます。	野上澄江 (久我山幼稚園園長)
この小さな絵本は、見るからに愉しく、かつ詩情に満ちている。わが子に揃えてやりたい。	北 杜夫 (作家)
小さな子に小さな絵本を・・・・かわいいシリーズです。子どもたちの心のふるさとなってほしい。	遠藤周作 (作家)
こんなに小さい絵本にこんなに楽しい内容をもり込めるとは・・・・かわいくて美しい絵本です。	白木 茂 (児童文学者)
ヨーロッパで出会ったこの小さな、素晴らしい絵本に、日本で再会できるのは楽しいかぎりです。	森久保仙太郎 (児童文学者)
ノートと教科書と辞書とピクシー絵本。女子大生のわたしには、かかせないものです。	アグネス・チャン (歌手)
安くて手軽に買える。それでいて、内容、表現ともしっかりしていて、とても良い絵本だと思う。	馬場のぼる (漫画家)
見て美しく、食べてもおいしく、栄養価も高い家庭料理。ピクシーは、そんな感じの絵本です。	高島忠夫・寿花代 (俳優)
ちっちゃくって、かわいくって、いつもハンドバックにいれておきたいような楽しい絵本です。	小嶋くるみ (タレント)
小さいけれど、楽しさはバツグン！まるで加藤ちゃんみたいな絵本だな・・・・。	加藤 茶 (タレント)
絵もお話も抜群。小さなポケットに楽しさいっぱい絵本、子どもたちの宝物になるでしょう。	西本鶏介 (児童文学者)
たのしいおはなしも、ふしぎなおはなしも、みんな小さなポケットに入ります。	安房直子 (児童作家)



図 3 いたずらハッピー

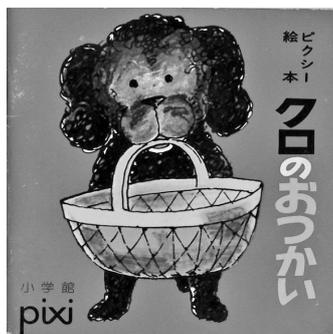


図 4 クロのおつかい



図 5 ねこのトルンテ



図 6 ひとりぼっちのおとこのこ



図 7 おじいさんと いっしょ



図 8 ママぼくできたよ



図 9 ようちえんだいすき



図 10 だれか くつのはもをむすんでよ



図 11 あかいとり あおいとり

3. 表現の表象について

物語の内部にしかけられた空間、語り手の存在、視点の工夫など、絵本にはさまざまなしかけがほどこされている¹⁾。

3.1 文化の違い

(表1)に示す通り、66冊の絵本が全て同一の作者ではなく、さまざまな作家の絵本である。インターネットがない時代に出版された絵本であることを鑑みると、小さな絵本の中に、子どもたちは遠い外国の様子や文化の違いを感じとることができる絵本であったと思われる。描かれた絵の色遣いや建物、家具、服など表現されているものの中から感知することができる。文化が異なれば生まれてくる表現に多少の違いを発見することができる。例えば、《いたずらハッピー》(1)(図3)この物語の中ではハムスターが男の子のかばんの中に入ってそのまま学校についていってしまうのであるが、教室の机の天板が上に開く形式のもので、下の空間に必要な物を収納できる机である。日本の小学校によく見かけられる、人物側に物を入れる空間が開口式になっている教室機の形式ではない。天板を上を持ち上げる表現が、ハムスターが中に入っている様子をより一層、小さな世界へのイメージを読み手に感じさせるのである。《ぼくはそらをとんだ》(2)主人公の男の子が空を飛んでみたら何ができるのか、想像の物語である。物語の中で建物のドアの表現が重厚な木のドアであり、装飾も重みを感じるデザインである。この重厚なデザインが、空を飛ぶ軽やかな表現との対比を鮮やかに映し出し、主人公の高揚した気持ちを感じることができる。《クロのおつかい》(3)(図4)犬のクロが籠をくわえて、おじいさんのおつかいにゆく物語であるが、クロがおつかいにゆく道すがらの建物の様子の色遣いがとてもカラフルである。赤い壁、水色の壁、緑の扉。それらは、買い物にゆく楽しさや、ときめき、犬のクロが一匹で買い物ができるのであろうかといっ

た期待感を感じることが可能である。《こねこのトルンテ》(4)(図5)おばあさんの籠に入って出かけたねこのトルンテが、トラックのクラクションに驚いて木に登ってしまい、降りられなくなるのだが、登場する消防車の青いランプやおばあさんの白い手袋に、自分たちを取り巻く世界に近いようではあるが、少し異なる絵の表現に文化の違いを感じとることが可能である。

表現における表象とは、ある対象や事象を言語や映像などの媒体を通して伝えることである。表象は、その媒体の特性や制作者の意図や視点によって変化し、受け手にもさまざまな影響を与える。表象は、社会や文化における価値観やイデオロギーを反映したり、形成したりする役割も果たすことができる。表現における表象は、私たちが世界を理解し、コミュニケーションするための重要な要素であると考えられる。

4. 表象における分類

本稿の中では、66冊のピクシー絵本をテーマで分類し、分類後に表現における表象、物語がどのような構図や色彩で描かれているのかを調査分析を行った。まずは分類にあたり、物語の主要テーマから6つに絞り込みを行った。複数のテーマが含まれる絵本もある。

I. 家族の暖かさを感じさせるもの、II. 社会規範性への学びを感じさせるもの、III. 動物(対象物)との触れ合いを感じさせるもの、IV. 未来における不確かなものに向かう為の勇気を得ることができるもの、V. 空想から広がる世界を感じさせるもの、VI. 童話、この6つに区別し分類を行った。これらの分類を行うあたり、登場人物の心の動き、内面、外の世界への関わり方をどう理解するかを考察するために、これらの分類は表現における表象を考察することにとっては重要な事柄の一つであると考えた。

絵本の場合、本の内容としての構造論は、それだけに留まらず、空間性や物質性をもった本のあり方と必然性からみあっている。絵本では、そ

の大きさ、判型、製本のしかた、重量、手触りなど本の存在条件と共に空間を横断しながらページをめくることによる画面変化が重要な意味を持っている²。

4-I 家族の暖かさを感じさせるもの

《インゲルちゃんのことり》(5) ことりが、籠から外の世界へと飛び出すと、外にはどんな世界が待っているのかが描かれている物語。籠から飛び出すことで、寂しさや困難に直面する。最後にインゲルちゃんに再開してからの背景の黄色で暖かく描かれており、この色彩から、家に帰ってきて安堵する様子を感じとることができる。《おたんじょうびのケーキ》(6) テアおばさんが買い物に行き、ケーキを作るお話である。道がピンクであったり、ケーキを作っているテーブルのクロスの様子が白と水色の市松模様であったり、小麦粉をこねるボールが緑であったり、カラフルな色調が、いったい何を作っているのかと楽しみな気持ちを掻き立てる表現になっている。また、最期の頁には見開き全面に出来上がったケーキが大きく描かれており、そのモチーフの大きさが、なぜ買い物にいったのか、また誰の為にどんな気持ちでケーキが作られたのかを表現している。

他にもこのテーマの物語に、《ママおはなしして》(7)、《こじかちゃん》(8)、《おおきな おにいちゃん》(9) などがある。この物語の主人公は兄弟である。小さいわたしからの視点で、おおきなおにいちゃんが描かれている。緑の椅子や緑のカーペット、それらが、象徴的に描かれており、色を揃えて道具を表現することで、より一層強くそのメッセージ性が伝わると考えられる。《ひとりぼっちのおとこのこ》(10) (図 6) 男の子にお友達が出来るまでのお話をモノクロとカラーで美しく対比して描いた物語である。物語の前半は男の子と男の子がペンキで描くもの以外は全てモノクロで描かれ、世界の寂しさや切なさを感じる。しかし、一人の女の子と出会ったことから、世界は生き生きと色彩豊かになり、輝くようになる。絵本における絵の表象が形と色彩とで表されてい

る物語である。《おじいさんといっしょ》(11) (図 7) トロルデンちゃんとおじいさんの優しい眼差しのお話である。全体に緑が基調である。描かれるお花や焚火の煙、おじいさんの赤い帽子に青い洋服、トロルデンちゃんのピンクの水玉模様の洋服に紫色の縞模様のタイツなど、一見派手に感じる色合いであるが、この物語は明度の低い抑えた色調の中に描かれているため、全てが調和して一つの絵画に描かれているような表現になっている。

4-II 社会規範性への学びを感じさせるもの

《ママほくできたよ》(12) (図 8) 男の子が自分の身の回りのことができるようすを丁寧に描いている物語。自分の身支度から、身体的にジャンプや三輪車にのれる様子を描写している。この物語には印象的な色彩がある。まずは表紙である。真っ赤な背景に得意げな男の子が描かれている。物語の途中の背景はほとんど白色が基調であるが、物語の後半、就寝前のお話をお母さんにしてもらう様子のみ見開き全面の背景がセルリアンブルー、ターコイズブルーの色彩である。次に最期の頁、背景は白色のみである。「きみは、なにができる……？」と読者に問いかけがある。保護者からの愛情を感じた後、勇気を得て自分自身を奮い立たせる表現が、背景の色の変化からも感じさせるようになっている。表紙から最後の頁までの、この背景の配色の変化は、物語の簡潔な躍動感を感じさせるのに非常に効果的である。

《たまごはいくつ》(13) にわとりが巣に卵を産み、その卵は数と共に黄土色で描かれている。あひるも水色で描かれた卵を 6 つ産む。産んだあひるが散歩に行っている間におばさんが、にわたりの巣に卵を一緒にいれて、どのようなことが起きるのかというお話が描かれている。最初になわたりが産んだ卵は 1 つ、2 つ、3 つと卵が巣に産みつけられるごとに 1 頁を使用して表現されている。次にあひるが卵を産むときに、それらは 1 頁に一括して表現されている。最初に数を表現する

ときは一つ一つ丁寧に描かれ、次に数を表現する時には一度に描かれている。その表現の差が、数への興味を持つきっかけ、または想像力を働かせることができる。異なる種別の同数の卵が一つの巣に入ったらどうなるのか、数だけではなく、その後起こる出来事への想像も楽しむことができるような仕掛けも描かれている。

《ぞうのピーター》(14) ぞうのピーターが、朝起きて洋服を着ていくようすの物語である。この物語の表現の一番の特徴は絵の図柄が天と地に固定されていることである。そして文章は見開き左側、服の絵は見開き右側に固定し表現されている。画面の下部には均等に並んだ花が描かれている。この均等に描かれている花が線路を進む電車のように、頁をめくる手掛かりになっている。見開きと最後の頁にはまるで踊っているような服が描かれており、それらを取り囲み花が描かれ、日常の行動に何かしらの、リズムや楽しさといったものを感じさせるようになっている。《ねずみちゃんのおみやげ》(15) ねずみちゃんがちいさな籠を持って、お散歩に行きお花を摘んだり、実を採ったりする様子が描かれている。また、おみやげをいろいろと籠の中に入れるときに数を意識できるような構成になっている。この物語で印象的な箇所は、見開き最初の頁と最後の頁の背景が同じ黄色であることである。散歩にゆく高揚感、また、散歩で何かを見つけた嬉しさが、背景が黄色になっていることで、より一層その気持ちが伝わってくる。散歩の途中の背景は白色である。また、主人公のねずみちゃんが頁に対して大きく描かれており、その採集する様子をじっくり観察することができる、読者にも散歩に行き、何か見つけることができるような気持ちにさせるように描かれている。

《ようちえんだいすき》(16) (図9) 幼稚園でどんなことをするのが描かれている。全ての頁において白色が基調となっており、その中にカラフルな服を着た子どもたちが描かれている。子どもたちの顔や手足は白色で描かれており、形のアウトラインのみ黒色で縁取りされている。この色

のコントラストが幼稚園で行うさまざまな行動への期待を感じさせるようになっている。子どもたちの服のみがカラフルに描かれている為、一人一人の動きだけではなく、集団で動いているときの楽しさといったものがリズムのようになっている。また、象徴的な道具、絵具、みかん、おもちゃといったものも、ところどころカラフルに描かれており、幼稚園での様子に期待が膨らむように描かれている。最後の頁で保護者が迎えにくる場面がある。そこでは、保護者は白色に黒のアウトラインの形で描かれており、カラフルな服を着た子どもたちとの対比が、お迎えの嬉しさを感じる表現になっている。

《ビクターおじさん はしをかける》(17) ビクターおじさんとかもめくんが、小さな島に住んでいたのであるが、現況を寂しく感じ橋を架けてみたところ、さまざまな変化が島に起こる物語である。表紙が黒色でタイトルが青色である。この色の取り合わせが、何か不確定な、そして少し不安定な感じを醸し出している。この絵本の見開き以外の頁をまとめて垂直に立ててみると、物語の内容とは別に絵が浮かび上がる。海の中の小島にいるおじさんが一人で釣りをしている一枚の絵である。物語の内容を確かめる為にもう一度最初に戻り読み直す時に気付くようになっているかのである。とても興味深い表現である。

《じどうしゃができたぞ》(18) 二人の男の子がさまざまな工夫をして自動車を制作するお話である。設計図を描き、道具を揃えて、組み立ててゆく。自動車が組み立てられてゆく様子はカラーで表現されている。一転、完成した自動車は「さあ、ドライブだ。どこへ いくか？」の文章と共に最後にモノクロで表現されている。完成した自動車をモノクロで表すことで、読者がもし自分の自動車を作ったらどんな様子になるのかと、想像する広がりをもたせている。《だれか くつのひもをむすんでよ》(19) (図10) 男の子が新しい靴の紐を、蝶々結びに結べるようになるまでの様子が描かれている。自分では結ぶことができなかつた紐を結んで欲しいと、人に頼むのであるが

断られ続け、最期に会った友達に、結んでもらうのではなく、結び方を教えてもらう。最後の頁に結び方の具体的な絵の図解が掲載されており、蝶々結びに挑戦したくなったときの読者の気持ちに寄り添っている。

《くまさんの プレゼント》(20) くまのテディが配達に行き、パーティに参加するために素敵なプレゼントを思いつく物語である。この絵本は絵本下部が白く抜かれており、その部分に文章が入っている。文字は下側、絵は上側に統一して表現されている。統一して表現されることで、主人公が配達しながら出会う事柄の時間経過を感じながら読み進めることができるようになっている。最期のページ右側、それまで平坦であった道が右上に少し上がってゆく表現は、これからも続く世界を感じさせるような配置になっている。

《ふうせんりょこう》(21) はりねずみのピーターが黄色い籠、赤い風船、黒い傘を持って空を旅行する物語。この物語の表現の中で特徴的なのが、空の表現である。はりねずみのピーターが地上にいる間と冒険の終了後はグラデーションで描かれ、それに対して、空に浮かんでいる間の空はマットな青で表現されている。この表現の対比が冒険の幅を広げているように感じる。《あかいじどうしゃ》(22) こぐまのテディが赤いスポーツカーに乗って出かけ、安全運転を学ぶようすが描かれている。主人公の視点で絵が描かれており、象にぶつかったときに、画面からはみ出た象が描かれることで、より危険な状態を読み取ることができる。対象物を全て描くのではなく、少しはみ出したように描くことでより大きな空間を表現している。《ぼくのおもちゃばこ》(23) 散らかったおもちゃ棚を綺麗に整理整頓する物語である。見開きの左側に文章、右側に絵が描かれていて、その構成は最初から最後まで統一されており、物語の全体を通して整理整頓するように描かれている。《おにんぎょうのメリーちゃん》(24) 女の子のガビーちゃんがお人形のメリーちゃんをお世話する様子の物語。全体に色彩豊かに描かれており、全ての形のアウトラインを黒で囲うことで、

面と線の配分がうまく調和し、表現されている。《おそうじだいすき》(25) おそうじだいすきジャンルのお話。掃除への促しと、他者への優しさの必要性が描かれている。掃除機が暴れてほこり(煙)を吐き出す場面で、灰色の濃淡が点々と重なり合う表現が出てくる。このほこりが舞う有様の描き方は、物語の変化と共に、五感を揺さぶるような描写である。

他にも、ヨルゲン・クレヴィン作・絵によるシリーズ 9 冊が分類される。《ねずみのおまわりさん》(26)、《いたずらっこだあれ》(27)、《おさるのペンキやさん》(28)、《たのしいかいすいよく》(29)、《ぼくのおよめさんて どんなひと》(30)、《ぞうのパンやさん》(31) 《ぼくのヘリコプター》(32)、《やさしい ゆうびんやさん》(33) これらの物語の中では、動物たちを通して、読み手が生活の規範を感じ取れるように構成されている。中間色は少なく、限られた色彩と黒の縁取りで描かれている。《12 までかぞえましょう》(34) 1 から 12 までの数が美しい挿絵で描写されている。数そのものの形体だけでなく、それらを取り巻く世界も淡い色調で描かれている。絵の中に物の数を探す喜びも同時に表現されている。《きいろちゃんとみどりちゃん》(35) 双子のきいろちゃんとみどりちゃんがいたずらを思いついて入れ替わるお話である。明度の低い抑えた色調の中に明るい二人の人物像が描き出されている。《そらをとんだめんどりさん》(36) 何もかも上手くゆかないめんどりさんが、空を飛ぶことができることに気がつき、自分自身への喜びを得るお話である。カラー頁と、色調を抑えた頁とが交互に現れる。《バスに乗ってかいものに》(37) 《もりのパーティ》(39)、ハンスが子豚を家に戻りたいのであるが、いやだいやだと動物も道具も言うことを聞きかないため、言うことをきくように知恵を働かせるお話《いやだいやだ》(39) などが分類される。

4-III 動物（対象物）との触れ合いを感じさせるもの

《いたずらハッピー》(1) 男の子のかばんの中にハムスターが入り学校に行ってしまう、そこでの出来事の物語である。最後に子どもたちがハムスターを写生するのであるが、主人公によって描かれたハムスターの場面、文章がなく大きく一枚に絵のみ描かれている。この大きく表現された一枚が、主人公のハムスターへの暖かい愛情を感じさせるのに非常に効果的である。《まで！ボールぴょん》(40) 男の子のボールが弾んで、あちこちにゆく物語。左から右へと道を進むように表現されている。その流れが、読み手も一緒にボールを弾ませているように感じる事ができる。ボールが池に落ち、右半分にかえるとおたまじゃくしが画面一杯に驚いて飛び出すように描かれている箇所がある。それまで軽やかに動いていたボールが、右半分一杯にモチーフが描かれることで、物語の動きを一旦停めて、主人公の男の子の元にボールが帰ってくる動きの緩衝になっている。

《わたしのあおいうさぎさん》(41) アンネちゃんのあおいうさぎさん（ぬいぐるみ）がスカーフをなくしたお話である。表紙の背景が赤色で、青いうさぎさんとの色の対比が元気よく表現されている。物語は夜を経過するのだが、背景は暗くならず、白色のままである。ぬいぐるみたちにとっては、夜に生き生きと動いているかもしれないと読者に想像させている。《メッテちゃんのひつじ》(42) メッテちゃんのこひつじが、学校に付いてきて起こる出来事の物語。全体に柔らかな色調の絵の表現である。表紙の（ひつじの）文字が、羊の毛の柔らかな特徴を捉えて装飾されており、メッテちゃんが羊を抱きしめる絵との響き合いが美しい。《クロのおつかい》(3) 犬のクロが、ハンズおじいさんのおつかいにゆく物語。左から右へと、物語の進行と共に、犬のクロが道を進んでゆくようすが描かれている。物語の視点が、犬のクロからであったり、街の人からの視点であったりする様子が、読者も街の中に入り込んだような心地になる。《ひよことおかあさん》(43) めんどり

が生んだ卵が、ひよこになるまでの描写を、細部まで生き生きと描かれている。写實的に卵の中の変化の様子が描かれており、生命への探求心を持つことができる。卵の中の日数による変化が表現されている。《こうまのゆうえんち》(44) 子どもたちとこうまの触れ合いが描かれている。見開き以外のページを垂直に立てると、子どもたちがこうまに乗馬している様子や、手綱を引く様子が浮かび上がる。全体で物語と輪になっているような様子である。

《ことりのけっこんしき》(45) 結婚式のお話。様々な鳥が結婚式での役割を果たしている様子が美しく描かれている。福島のリ子（作詞）、中部利彦（編曲）の楽譜が最初のページに記載されており、祝福されている様子が歌からも読み取ることが可能である。最後の満月の空が明るい緑、月は白く描かれており、その中を鳥たちが羽ばたいてゆく様子は詩的である。《どうぶつえん》(46) 動物園に来たこどもたちの視点から動物園の魅力を描いている絵本。動物たちが写實的に描かれており、文章は下方に纏められており、動きの少ない構図であることから、対象物をじっくり観察することへのいざないを感じる事ができる。同じように、動物園のお話で、《ペンギンぼうや》(47) がある。こちらはペンギンのぼうやからの視点で描かれており、色彩豊かに描かれた頁と白を加えた4色程の抑えた色彩で表現した頁とで構成されている。抑えた色彩の表現が対象物への丁寧な観察を促している。《ねこのトルンテ》(4) こねこのトルンテがおばあさんのかごに入り、街に買い物にゆきそこで起こる出来事の物語である。全体を通して水彩画で描かれた絵画のようであり、屋外での様子は寒色系の色彩を基調として描かれる。一転、家に帰って安堵した場面では暖色系の色彩で描かれており、その対比が登場人物の安堵した心情をより一層際立たせている。

4-IV 未来における不確かなものに向かう為の勇氣を得ることができるもの

《あひるのぴいこちゃん》(48) 主人公が、森へ向かう途中さまざまな困難に遭い、その中で自分の持つ能力で、得意な事があることに気が付いて自信をもつ物語。水かきがあるあひるちゃんは地上を転んだりしてうまく歩けない。その様子を動物たちや、かかしに笑われたりする。物語の途中、見開き頁の左側に悲しんでいるあひるのぴいこちゃんが、小さく描かれ、右側に助言をくれるかえるくんが大きく描かれている箇所がある。この大きさの対比が物語を変えてゆく有様をよく表している。物語の変化が登場人物の大きさで表現されているのである。《あかいとりあおとり》(49) (図 11) あかいとりとあおとりが安心して巣を作ることができる場所を探している様子が描かれている。雨が降ったり、煙で汚れたり、さまざまな困難に立ち向かうようすが、見開きに大きく表現されている。白色の背景に青と赤の鳥が描かれており、そのコントラストが美しく、立ち向かう力強さを感じることができる。巣を作った後、卵からひながかえり、次の頁でそのひなたちが光の中を飛び回るのであるが、描かれている巣のある木がとても象徴的に表現されている。卵からひなが育っている頁では、巣のある木は見開き半分を使用して大きく描かれ、次のひなが飛び立つ頁ではその木は左端に小さく描かれている。この大きさの描かれ方の違いは、頁をまたいで空間の大きさと時の流れを感じることでできる構図である。

《かわいいひよこ》(50) にわとりとひよこたちが森へ遠足。その中で一番小さなひよこが活躍する物語。表紙は黒色一色の中に円形があり、その中にひよこが描かれている。表紙に円形が配置されることで、まるで双眼鏡で覗いたかのような、物語中のひよこの冒険や活躍にフォーカスできるようなイメージになっている。《ねずみちゃんのおるすばん》(51) ねずみのおとうさん、おかあさんが食料を探しに行き、その間、子どものペレトリレだけで留守番をするお話。この物語の中

で、全面に絵が描かれているのは最初の頁だけである。その後は絵の塊と文字の塊が交互に現れるように描かれ、構成されている。絵と文字が交互に配置される表現が、子どもだけで留守番をしているときの少し不安な様子を感じさせる。配置であっても、このように読み手に心許ない気持ちにさせることが表されている。

《こぐまのぼうけん》(52) こぐまのビッテが、生きる知恵を学ぶ様子が描かれている。主人公の視点で描かれており、人間に対峙する場面もある。最後のページで鉄砲を持った子どもが遠くに逃げてゆく場面の様子は、遠近法で人間がとても小さく描かれている。また、雪の描写が筆のダイナミックなタッチを生かしており、より一層雪深さを感じることができる。

《あかいえりまき》(53) こじかちゃんが、おかあさんに編んでもらったえりまきを動物たちに見てもらいに森の中を走ってゆくののだが、気が付けばえりまきは全て解けており、迷子になってしまい、えりまきも解けてしまって、どのようにしたらこの問題に立ち向かうことができるかといった様子が描かれている。森の緑色と赤色の毛糸、コントラストのある表現が物語の疾走感を感じさせる。また最後に安心して眠るベッドが赤色で描かれており、赤い糸との共鳴を感じることができる。《こぐまちゃんのえんそく》(54) こぐまちゃんの家族が日常から離れて遠足に行き、家の良さを再確認するお話である。こぐまちゃんの家族が愛らしい様子で描かれている。途中で突然の雨に降られる場面で、雨が白い線と水色の線で家族に降りかかる箇所がある。その雨の表現が葉の揺れる様子と共に、優しく降りかかっているかのように感じる表現で描かれている。《はなかざりのぼうし》(55) 子羊のラムビンは花飾りの帽子が欲しくて籠に頭をいれてしまい、取れなくなってしまふ物語。色彩豊かに描かれた頁と、4色程に抑えた色彩の頁が交互になって構成されている。この構成のパターンは《ちいさなきつね》(56) にも見られる。ちいさなきつねの物語では、最終頁に文章はなく、全面に誇らしげなきつねの家族の

みが大きく描かれており、困難に向かう家族の結末を力強く感じることができる。

4-V 空想から広がる世界を感じさせるもの

《あこちゃんのコウモりがさ》(57) 主人公が、もしきれいな花柄の傘をおばあさんにもらったらどんなことができるか、その様子を空想した物語。この物語で象徴的なのが赤い花の表現である。傘の赤い花模様が、大人の世界へのあこがれや、空想世界の扉へのいざないになっている。そして、あこちゃんが、空想しているときは赤い靴を履いており、現実の世界にいるときは水色の靴を履いている。ほんの小さな違いではあるが、何かを暗喩しているような表現である。また、赤い花模様と赤い靴、この共鳴は何かを意味している謎解きのように感じることができる。《ぼくはそらをとんだ》(2) 男の子が空を飛んだらどんなことができるか、想像したお話である。男の子が縦横無尽に飛び、描かれている様子は、読み手も空を飛んでいるかのように感じることができる。グラデーションのある雲の色彩が、空の高さや広がりを感じさせるようになっている。人々が驚いて男の子を見上げている様子の頁には文章はなく、片側半分の頁にいっぱい人々の様子が大きく描かれ、読者も子どもたちと一緒に空を飛んでいるかのような心地になる。そして、一転、隣の頁には男の子が落ちてゆく様子が描かれている。物語の重要な箇所が右と左に同時に描かれており、事態の緊迫感を感じる。落ちてゆく男の子が3分割で描かれ、時間の経過も表現されている。最期の頁ではおかあさんに抱かれて目覚めるのだが、同じ頁の遠景の窓と一緒に飛んでいた鳥が描かれており、この鳥が描かれていることにより、先程まで空を飛んでいたことが暗喩されている。小さな画面の中に物語のテーマや世界観がちりばめられている。

《ぞうがほしいな》(58) もし象(テオドール)が男の子のそばにいたらどんなことができるかなと空想する物語。灰色の中にほんの少し色味の違った色が加えられて象が描かれており、主人公と

のつながりや鮮やかな空想世界を感じとることが可能である。

《おかしのぼうや》(59) おかしの坊やがおばあさんの台所から逃げ出す物語。全体に色鉛筆で描かれたようなタッチである。表紙が黄色で、クッキーの茶色とのコントラストが愉快的な様子を感じる。表紙の色と主人公の色彩が呼応して物語への期待感を感じることができる。《へんですよ へんですね》(60) 絵と文章をよく見てみる(よく読む)と、その2つのものが合致していないことを見つけることができるお話。背景は全体を通して隙間なく色彩で埋め尽くされている。そのことが、何かを探す喜びのきっかけになるのかもしれない。画面を埋め尽くす表現の一つの効果的な魅力の一つであると考えられる。

《おうさまとドラゴン》(61) おうさまのお城に防犯の為にドラゴンが連れてこられる物語である。描線が動的で、画面の遠近の取り方や背景の描き方などが写実的で細部まで描かれている。ピクシー絵本シリーズの中で唯一、登場人物の発言としての吹き出しがあり、吹き出しの形の中にドラゴンが描かれている。

4-VI 童話

《こびとのくつやさん》(62) (グリム童話より)、靴屋さんの窓が各頁で効果的に描かれている。青色が基調の窓から小人がやってくる様子が、時間の経過を感じさせ、また不思議な物語であることを際立たせている。《3びきのやぎ》(63) 北欧民話の物語。3匹のやぎが渡りたい橋の下に大男が隠れている。そして、そこをどのようにして通るのが描かれている。大男との闘いの表現が水色の筆と灰色の線と点で効果音のように描かれており、臨場感が溢れた表現となっている。また、空に浮かぶ雲が、雲の具体的な形を描くのではなく、水色と緑のまっすぐな線のみで描写である箇所が、これからおこる出来事の不穏な空気感を醸し出しているようである。《しらゆきひめ》(グリム童話より) (64) 見開きと最後の頁だけが山吹色の背景に小人たちが同一の絵で描か

れており、物語は色彩豊かに描写されている。最初と最後が同一の絵ではあるが、物語の始まりの頁のみ、隣の頁の小人が一人彩色されている。その反復だけではない面白さが、小さな画面の中にあちこち現れている。他にもピクシー絵本シリーズの中で童話は《あかずきんちゃん》、(65)、《おおかみと7ひきのこやぎ》(66)がある。

5. ま と め

絵本についての表現における表象とは、絵本の中で描かれる物語や登場するものたち、世界観などが、作者や読者の心理や文化、社会などにどのように影響されているか、またはどのように影響を与えているかということである。絵本の視覚表現の中で色、形、素材、技法などはそのどれをとっても絵本の表現コンセプトとかがかわってくるが、特に表現構造は時空間を作者がどう解釈しているか、また、登場人物の内面や世界をどう理解しているかなどをもっとも明瞭に表現できるものではないだろうか³。

絵本は言葉と絵という二つの大きな要素から成り立っており、それぞれが表象の手段となって、言葉は物事の意味や感情を伝える役割を持ち、絵は物事の形や色、動きなどを視覚的に表現する役割を持つ。言葉と絵が相互に補完しあったり、対立したり、独立したりすることで、絵本の表象は多様な可能性を持つことが可能である。

ピクシー絵本シリーズの表現を分類して調査した結果、このシリーズの表現における表象は、物語の文章が装飾されておらず、一定の抑えた表現である言葉であること、また 10cm 四方の小さな絵本であること、この2点が絵本をすみずみまで見渡しやすく、細部まで楽しむことを可能にして

いると推察することができた。

小さな絵本は、言葉と絵に限られたスペースに収まっており、物語や登場人物、世界観を表現する際に工夫が必要である。絵は全体を表現し、必要に応じて細部が描かれる。小さな絵本は作者の創造性を高めるだけでなく、読者の空想力や想像力も高め、また、言葉や絵から物語を補充し、自身で物語を広げていくことができる。言葉や絵から感情やメッセージを受け取り、自分の心に響かせることが可能になるのである。

絵本における表象は多面的で複雑なものであるが、それだからこそ、魅力的なメディアであると言える。絵本における表象を分析することで、私たちは自分自身や他者という存在を深く理解することができると思う。本稿の調査を踏まえ、小さな絵本における表現の表象について課題とし、更なる調査を進めたい。

引用文献

- 1 竹内オサム (2002) 絵本の表現 P.10
- 2 中川素子 (2011) 絵本の辞典 絵本の表現構造 P.370
- 3 中川素子 (2011) 絵本の辞典 構造の重要性 P.373

参考文献

- ピクシー絵本 (1974. 1975) 小学館 (注) 作/絵、訳/文の表記の為、表1にて掲載
ピクシーえほん (2001) フェリシモ出版
絵本はいかにして描かれるか (表現の秘密) (1999) 日本エディタースクール出版部

本研究で使用した絵本の表紙、裏表紙画像は、出版社の許可を得て使用しています。

ありた やえ

甲南女子大学人間科学部総合子ども学科非常勤講師